

「栄光をお受けになるとき、私どもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」今日の福音の中で、ゼベダイの二人の息子ヤコブとヨハネはこのように願っています。ガリラヤ湖の岸辺で自分たちを呼ばれるイエスの声を聞いたとき、二人は父親のゼベダイと雇い人たちを舟に残してイエスに従う道を歩み始めたのでした。

先週の日曜日の福音では、「永遠のいのちを受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」とイエスに尋ねた裕福な人が、「持っているものを売り払い、貧しい人々に施しなさい。それから、わたしに従いなさい」というイエスの招きを受け止めきれずに、悲しみのうちにイエスから離れて行ったことが語られていました。その人が立去った後で、ペトロは「このとおりに、私たちは何もかも捨ててあなたに従ってまいりました。」と誇らかにイエスに言ったのでした。そのペトロのことばに答えてイエスは言われました。「はっきりしておく。私のためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者は誰でも、今この世で迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠のいのちを受ける。」

「栄光をお受けになるとき、私どもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」と願った今日の福音のヤコブとヨハネの心の中には、このようなイエスのおことばが刻まれていたことでしょうか。あのガリラヤ湖の岸辺にそれまでの生活の全てを残して、イエスにつき従って来た自分たちをイエスは弟子として認めてくださり、その自分たちにイエスは後の世の永遠のいのちまでも約束していてくださる。イエスが慈しみの目を注がれた先週の福音の中のあの富める人がイエスの招きを受け止めきれずに、悲しみのうちにイエスのもとから立去り、イエスがなおもその人を惜しんで、「財産のある者が神の国に入るのは、何と難しいことか」と嘆かれる様子を目の当りにして、弟子たちは一層イエスとイエスの弟子としての自分たちの特別な絆を意識したに違いありません。「このとおりに、私たちは何もかも捨ててあなたに従ってまいりました」というペトロのことばは、ヤコブとヨハネの思いでもあったのです。イエスの弟子として自分たちはイエスとの特別な絆に結ばれているという甘美な自負の思いに酔って、ヤコブとヨハネの兄弟は、今日の福音の中でそのようなイエスへの願いを披瀝したのでしょう。

「あなたがたは自分が何を願っているのか、分かっていない」イエスはどのような語調をもって二人にこのように言われたのでしょうか。このように語り

かけることによって、イエスは二人を厳しい語調で叱責しているとは思えません。「あなたに欠けているものが一つある」とあの金持ちの人に語りかけられたように、イエスはこのおことばをもって二人を一層御自分の近くに招こうとしておられるように思えます。「あなたがたは自分が何を願っているのか、分かっていない」と言われたイエスは「この私が飲む杯を飲み、この私が受ける洗礼を受けることが出来るか」と問いかけておられます。イエスにこのように問いかけられたとき、ヤコブとヨハネの二人は、どこまでこのイエスのおことばの意味を理解できていたのでしょうか。イエスのこのおことばが指し示す、イエスの弟子としての自分たちの歩む道の全てを見通すことが出来ていたわけではない二人はそれでも「出来ます」と応えたのでした。それが実際にはどのようなことを意味するのか十分には理解できないままに、二人はイエスが飲む杯なら自分たちも飲み、イエスが受けられる洗礼なら自分たちにも受けることが出来ますと応えたのです。イエスが何を言おうとされているのか十分には理解できないままに二人はどのようなことがあっても、イエスとともに歩みとおす決意を表明したのです。そのような二人に対してイエスは「確かに、あなたがたは私の飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる」と言ってくさるのです。こうして二人は、十字架の道を進み行かれるイエスの後につき従うイエスの弟子として、イエスによって一層そのお側近くに招き入れられて行くのです。

それにしても、「栄光をお受けになるとき、私どもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」と願ったヤコブとヨハネにイエスはどのような思いを込めて「この私が飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることが出来るか」と問われたのでしょうか。福音書の全体を通してイエスの十字架への道をたどる今の私たちは、イエスのこのおことばの意味するところを、あの時の二人よりもよく理解出来ているはずです。

「この私が飲む杯」というイエスのおことばは、ゲッセマニの園でのイエスの最後の苦悶の祈りを私たちに思い起こさせます。ゲッセマニの園で十字架の死を前にしたイエスは「アッバ、父よ、あなたは何でもお出来になります。この杯をわたしから取り除けてください。しかし、わたしが願うことではなく御心に適うことが行われますように」と祈られるのです。遡って、イエスが洗礼を受けられた時のことを思い起こしてみると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という父なる神のみ声がイエスの上に響いたのでした。イエスの洗礼はあのヨルダン川での洗礼の時だけのことではなかったのです。「アッバ、父よ、わたしの願うことではなく、御心に適うことが行われますように」とのゲッセマニのイエスの最後の祈りは、洗礼から始まったイエスの十

十字架への道が、イエスの十字架上の死によって成就されることを求める祈りであったのです。このようにして、イエスはその十字架の死によって「あなたはわたしの愛する子、わたしのところに適う者」という、父なる神のみことばを、受け止めきられたのです。そのようなイエスの飲む杯を飲み、イエスが十字架の死によって完成される、父なる神の御心に適う者としてのイエスの洗礼を受けることが出来るかと、イエスの右と左に座することを願った二人の弟子にイエスは問いかけられるのです。

「わたしの杯を飲み、わたしの受ける洗礼を受けることが出来るか」とイエスに問われた時、ヤコブとヨハネはそれがどのようなことを意味しているか十分には理解できないままに、「出来ます」と応えたのでした。けれども、ヤコブとヨハネだけではなく、私たちの誰が実際にあの十字架においてイエスが飲まれた父の御心としての苦難の杯を飲み乾し、イエスのように、父の御心に適う者となって、父の御心が示す洗礼を受け止めきる事が出来るのでしょうか。イエスのあのゲッセマニの祈りを思い起こさなければなりません。「アッバ、父よ、あなたは何でもお出来になります」と父なる神の御心としての苦しみの杯を前にイエスは祈られます。このイエスの最後の祈りは、先週の福音の中のイエスのおことばを思い起こさせます。

「神の国に入ることは何と難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがまだ易しい」というイエスのことばを聞いて、「それでは、誰が救われるのだろうか」と互いに言い合っている弟子たちを見つめてイエスは言われたのでした。「人間には出来ることではないが、神には出来る。神は何でも出来るからだ。」

苦しみの中で、苦しみの意味が見えなくなるとき、それが「わたしに従いたいと思うものは自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」と言われるイエスに従い通すために必要な苦しみであることを受け止め切れなくなるとき、このイエスのみことばを思い起こす恵みを祈りたいと思います。私たちもあの二人の弟子のように、洗礼を受けミサに与る者たちとなったことによって「わたしの飲む杯を飲み、わたしの受ける洗礼を受けることが出来るか」とのイエスの問いかけに「出来ます」と応えたのです。そのような私たちのイエスの応答が、不可能を可能とすることが出来る神の御力によって、私たちの生涯を通してのイエスに対する答えとなるよう、苦しみの最中であって、絶えず、父なる神の助けを祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高